

## 灯

京都で長年、創作舞踊を発表し、おとし12月に亡くなった日本舞踊家西川千麗さん。先月、彼女の志を継いだ研修道場から一周忌の冊子を頂戴した。

千麗さんは、振り付けはもちろん衣装や美術、音楽まで自らの原案で作るスタイルを貫いた。題材は宮沢賢治の「よだかの星」といった文芸作品から「十牛図」などの思想書、能、絵画まで分野を選ばず、海外公演も実現させた。

冊子の寄稿者は多彩だ。作家の瀬戸内寂聴さんをはじめ、染織家の志村ふくみさんや文学者芳賀徹さんら、日舞の枠を超えた顔ぶれが故人をしの

## 千麗さん一周忌

ぶ。すでに亡くなっていた臨床心理学者の河合隼雄さんや俳優岸田今日子さん、社会学者の鶴見和子さんも千麗さんのよき理解者で、生前の文章が転載されている。

因習にとらわれず、何の後ろ盾もない立場から人脈を築いた。ゆえに普段から読書や舞台、美術鑑賞の間は惜しまず、取材時は高い美意識と教養の深さに圧倒されたことを思い出す。

頂く手紙は、和紙に直筆でひと言が添えられていた。孤高を恐れない粹人だったと思う。遺志だろうか。冊子の装丁には千麗さんが着ていた和服の生地が、さりげなく使われていた。